

小菅登女さんの花とお茶に人は集まる

平成二十六年五月二十日 児島 拓

●都心まで一時間の秘境

千葉県佐倉市の中心部にある京成佐倉駅から、成田空港方面へ一駅約二分、距離にして約二kmに位置する大佐倉駅。京成本線の特急列車が止まり、都心まで約一時間。でも京成線内で乗降客数が最も少なく、駅周辺には多くの自然が残る。人呼んで、京成線最後の秘境。

そこから小菅登女さんの住まいは歩いて三分。

小菅登女さん（昭和十二年生まれ七十七歳）は語る。



●花のガーデンでお茶を飲んで

一昨年、北海道へ行って、富良野にある風のガーデンを見てきたよ。それをもとに、自分の家の近くの土地に花を植えているよ。名づけて、花のガーデン。雑木林となっていたところの木を切って、山を平らにして、文字どおり開墾していった。そこに、もともと鉢で育てていた花を植えていったら、色とりどりの花が

咲きほこるようになったね。今の時期は、バラがきれいだよ。それから、人のたまり場となるよう、ガーデンの隣に、日よけや雨よけとなる、ビニールハウスのような屋根を取り付けたハウスを作ったよ。ここに来た人は、このハウスでお茶を飲んでいくということになっているね。

【花のガーデン】



●子どものころは戦時中 手伝いと自然が友だち

戦時中は、学校は行くけれど、すぐに警報が鳴って、帰宅していたね。佐倉連隊が近くにあることもあってか、いつもそんな感じだったよ。防空壕にもぐったりもしたね。山菜を取りながら、山の中を通って、通学していたよ。

農家だと、農繁期になると、畑や田んぼの手伝いや、子どものお守りがあるというところで、早く帰れたね。お弁当を持って、田んぼに行っていたよ。

とにかく今は、子どもがいらない。昔は、家の中で遊ぶという考えはなくて、外で遊ぶのが当たり前だったね。上の子が下の子の面倒見るとい感じで、ガキ大将

みたいな子も必ずいたね。印旛沼で泳いだり、船に乗ったり、とにかく自然が友達だったよ。父親が買ってきた軍で使っていた馬を乗り回したりもしたね。一度降りたら、もう自分では乗れないから、必死だったよ。カラスを飼っていたりもしたね。新制中学まで出たけれど、勉強をした記憶はほとんどないね。

●大佐倉地域は昔ほとんど農家

大佐倉駅は、一番乗降客数が少ない駅で、昔も少なかった。線路を通すという話があったときに、地主が集まって、話し合った。そのときに、駅ができれば、土地を提供するし、線路を通してよいということ、鉄道会社と交渉していたね。今まで市長二名に、市議会議員、県議会議員も出していて、地域としてのまとまりはあるね。このへんには、佐倉城のできる前から根古谷城（本佐倉城）もあったし、印旛沼を利用した海路が栄えていたようで、船着場もあったと聞いているよ。

昔は、ほとんど農家だったけれど、今では、農家を専業として行っているのは、数名くらいかな。若手はいないね。会社勤めが多いかな。今そこに来たおいの英樹は、第二種兼業農家。農協に勤めながら、農家をやっているよ。

●若いころは、農家が嫌で、東京へ、結婚。でも子育てにいい大佐倉へ戻った

若いころは、農家が嫌で、東京へ出たいと思っていた。京成の社員で、ちょうど大佐倉駅で働いていた東京の下町の方と結婚したよ。九歳年上だから、まあいいかなど。ただ、東京は子育てをする環境にはなかったから、大佐倉へ戻ってきたよ。

農家をやり始めたのは、定年になって

からで、それまでは、ゴルフ場で働いたり、学校の事務員をやったりしていたね。生活するには、夫の稼ぎだけでも十分だったけれど、夫と二人で働いたから、旅行に行くとかいろいろなことをできたね。子どもにはやるだけのことをやったよ。

自分が子どもだった大変な時代のことがあったから、子どもには一人前に教育を受けさせてあげたいと思っていたね。だから、息子は大学までやったよ。息子も自分の若いころと同じく、東京に出たがっていて、そのころは景気もよくて、就職の受け皿はたくさんあったね。ただ、東京へ出ると、給料をいっぱいもらっても、生活するのに相当なお金がかかるし、地元で就職したほうがよいと話し合ったよ。今では、近くに来てくれてよかったと、本当に思うね。ただ、近いとはいえず、息子の家には、めったなことがない限り行かないよ。

娘も短大まで行かせたね。子どもには、二人とも一台ずつ車を持たせて、結婚式を挙げさせて、これで親の責任は果たしたと思ったね。そう思っていたら、今度は孫ができて、定年してからも、男一人、女二人の孫育て。

●自分の世界、自分を大事に

女性は長生き。働きながら、短歌や日本画、編み物をやっていたよ。もう三十年以上続けているね。子育てだけではなく、自分の時間をしっかりと持つようにしていたよ。自分の世界、自分を大事に、ということだね。

身に付けたものは、全て自分のもの。講師というような大げさな形ではないけれど、みんなに教えているよ。やったらやったことは、無駄にはならないよ。うまいへたではないね。年とってから、何か始めるのでは遅い。働きながらでも、

続けることが大事だよ。公民館で、短歌の集いをやっていたね。絵画のコンクールにも出品したね。締切があれば、人間やる気になる。人は怠けてしまうから、こういうものに出すと決めると、やるようになる。勤めながら、締切に向けて夜中までかかってでも描いていたよ。

●定年して今は半日仕事、半日ごろごろ

定年してから、きゅうりやナスを自分で作っているよ。このへんでは、たけのこやみつばも自然に出てくるね。半日は仕事で草取りとかをして、半日はごろごろしているよ。

孫育てもして、孫が大きくなってきたら、今度は旦那の世話。夫婦喧嘩は、なるべく避けていたね。別れるつもりがあるなら喧嘩してもよいけれど、そうでなければ、やっても仕方ない。別れても、他にそんなにいい人がいるとも思えないし。いろいろと思うことがあったときは、花をいじったり、自分の好きなことをやったりしていたよ。五十年間、仲良くしなきゃと、やっていたね。何とかうまくやっていたと思うよ。

物のない時代をすごしてきたからか、子どもからは、服とか本とか何でそんなの取っておいてあるのと言われるけれど、自分が生きている間は、このままにしておいて、どうにかするのは、自分がいなくなつてからにして、ということをやっているよ。

●夢がある たった一枚の絵美術館 家にこもらないでお年寄りがお話とお茶を楽しむガーデン

ガーデンは、みんなとの集まりができるようにしてあるよ。家にこもっている年寄りがいなくなるようにね。今まで、描いた絵を一枚の絵として、展示したい

ね。一枚の絵美術館だね。たった一人の。作品を入れ替えながら、他の人の作品も展示するつもりだよ。ガーデンのお花を見ながら、絵を見ながら、お話とお茶を楽しむ。息子が建築をやっているから、もう相談してあるよ。早く実現させたいね。



小菅登女さんにお話を聞いた。

駅は近いのに、車一台通れるくらいの狭い道。でも車や人の往来が思いのほか多い。前の市長婦人と仲間たちがやってきた。小菅登女さんの花のガーデンを見て、ビニールのハウスでお茶を飲み楽しんでた。人は楽しい所に自然と集まるのだった。

登女さんの、花は飾るのに飾り気の無い人柄がみんなに楽しむ庭を届けていた。夢もあった。何か新しいことに取り組んでいた。自分の時間をしっかりと持つようにしていた。自分の世界、自分を大事にしていた。

いい人生を送っていた。